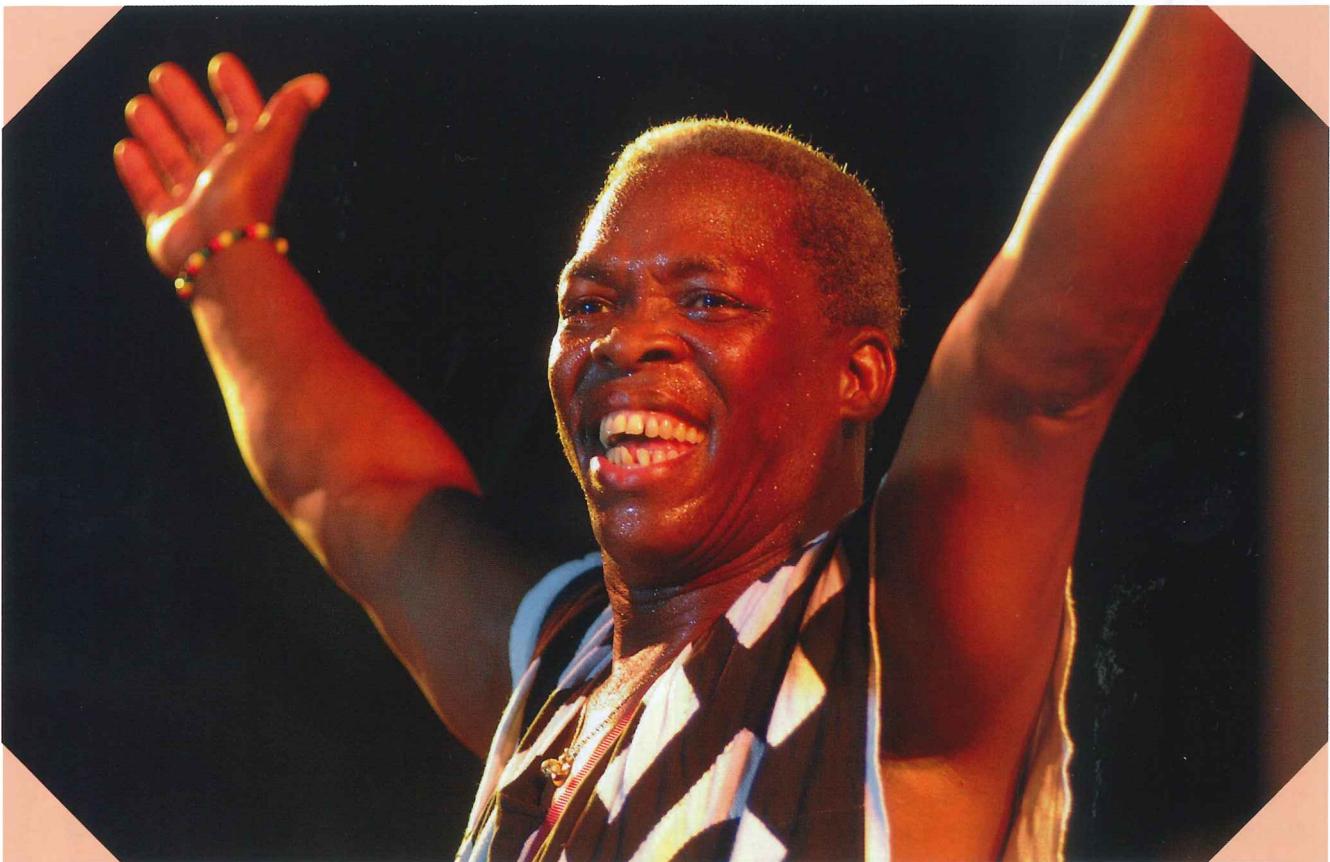




広報 活力 神

8

Aug.2021
No.587



ママディさんを偲ぶ 村長 大山辰夫

六月二十一日ベルギーの病院でママディケイタ氏が家族に看取られ亡くなりました。七十一歳でした。死因は心臓病の合併症だったそうです。後日、ギニア共和国の国営放送で追悼特番が約一時間放送され、その中で一九九四年のママディと三島つ子たちの全国ジャンベツァー、二〇〇五年の愛知万博でのギニア共和国ナショナルデー参加の三島つ子たちの様子、バルンデュグ村に本村が建設した診療所の出来事、そして、ママディが繋いだ今回東京オリパラのホストタウン等の数々の本村との交流が紹介されたそうです。

遠来の友ママディと長年交流を続けるなかで、いつもその中心には三島つ子の存在がありました。自分の音や音楽を忘れることは故郷を忘れることがあります。そして、バルンデュグ村を訪問した本村の中学生四人と村人の前では、「三島の子供たちがバルンデュグ村を幸せにする、三島の子供たちが来たのは神の御業、伝統を失うともっと大切な多くのものを失う」と説いています。また、数々のあいさつの面でも必ず、その時に関わったすべての方々への感謝の言葉からあいさつが始まります。

このようにママディさんは人種を超えた温厚な人柄で私たち日本人が忘れかけていた誠実さや謙虚さを身をもつて教えて導いてくれた人格者であつたと思っています。

改めて、これまでの本村への多大なる貢献に対し心より感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

最後に今年のママディ二十五周年を祝う記念事業の実施を強く望んでいただけに無念でなりません。

～令和2年度～
いじめ根絶標語
(コンクール入賞時の学年)

○三島硫黄島学園3年 ヴィノクロフ 怜 いじめ〇 今日も平和に ワッハッハー
○三島大里学園2年 平良 裕愛 いじめやめ みんなであそぼう 会話もはずむ

ありがとう！ママディ



「ぼくのことを友達と思ってください。」

初めて会った三島村の子供たちに、太陽のような笑顔であなたは語りかけてきました。

そして、「君たちのことを一生忘れない。」

目に涙をいっぱい浮かべてあなたは帰って行きました。

「ぼくは必ず帰ってくる。」と言ったあなたは、その言葉どおり毎年のように三島村を訪れました。もう一度会いたかった。

私たちはいつまでも忘れません。安らかにお眠りください。



「三島村に、なぜジャンベなのですか？」

と、よく聞かれことがあります。今や「ジャンベの島」といわれる三島村。日本の小さな離島の村と、遠いアフリカ・ギニアの小さな村の交流は、誰もが「なぜ？」と思う不思議な組合せに違いありません。

それは、1994年の「三島っ子ジャンベツア」が始まりでした。しかし、その時、ジャンベがこれほどこの島に根付くことを誰が想像できたでしょうか。

島を訪れた偉大なジャンベフォラ、ママディ・ケイタさんは、それ以来、三島村をこよなく愛し、毎年のように訪問するようになりました。三島村の村づくりはママディさんとともにあり、ジャンベとともにありました。

ママディさんは、正に三島村の恩人といえる人です。今では三島村の子どもたち全員がジャンベを叩き、アフリカの歌を口ずさみ、ダンスを踊ります。バランデュグ村の子どもたちを迎えて交流することもできました。海外で演奏したり、愛知や横浜で演奏したり、そして天皇皇后両陛下の前で演奏したりするなど、奇跡のような物語が、長い友情と絆を通して紡ぎ出されていったのです。

ママディ、天国でもジャンベを自由自在に奏でながらあの最高の笑顔で、三島村をずっと見守っていてください！

三島村教育長 室之園晃徳

ママディ & 三島ヒストリー

1950年 ギニアのバランデュグ村生（王族の家系）

1957年 ジャンベを始める

1966年 ギニア国立ジョリバ舞踊団に入団

1988年 ベルギーに移住

アフリカ音楽学校『タムタム・マンディング』を設立、演奏グループ『SEWA KAN』を結成

1993年 フランスとギニアの共同映画『Djembefola』が公開（ロラン・シュヴァリエ監督）

1994年 三島村に初来島「みしまっ子ジャンベツア」

1999年 三島の生徒4名がバランデュグ村訪問・交流

2001年 ドイツ公演（三島の子供たち）

2004年 「みしまジャンベスクール」を硫黄島に開校

2005年 「愛・地球博」で、三島の子供たちが演奏

2008年 村長がバランデュグ村訪問（診療所起工式）

2009年 「交流15周年記念フェスティバル」開催

2012年 「タムタムマンディングジャパン」設立

2015年 「日本ジャンベフェスティバルinみしま」開催

2021年 6月21日 心臓病の合併症で死去

※その他も含め、三島との交流は約20回に及ぶ

ママディは、西アフリカ伝統的打楽器「ジャンベ」を世界に広めるキッカケをつくった人物で、キング・オブ・マンディカ（アフリカで最も偉大なドラマー）やジャンベフォラ（ジャンベの神様）といわれ、世界中多くの人たちから敬愛されています。

ママディは、1950年、アフリカのギニア共和国のバランデュグ村で生まれました。7歳からジャンベの演奏を始め、14歳には早くもギニア国立ジョリバ舞踏団にスカウトされ、以後同舞踏団の主席ジェンベ奏者として世界60ヶ国で公演しました。

1988年からベルギーに移住し、アフリカ音楽学校『タムタム・マンディング』を設立、1994年の夏には、演奏グループの「セワ・カン」と共に日本ツアーを行いました。

その際に、三島村を訪れ、島の子供たちとの交流を描いたNHKドキュメンタリー番組『響け！アフリカの太鼓～ママディ・ケイタと19人の子供達』（野々上勝男プロデュース）は日本で全国放映され、ブルガリア・ゴルデンアンテナ国際番組賞を受賞しました。

1994年の夏、このときからママディと三島村の友情の物語が始まったのです。



ジャンベオラ
がやつてきた!!



ママディさんの訃報を聞き、悲しみに耐えません。
半世紀前の1971年8月、彼が20歳で、初めて日本に来て、素晴らしい演奏をした姿を今もよく覚えています。

そして、その後もかけがえのない太鼓の友人でいてくれました。世界にアフリカ人ママディ・ケイタの太鼓を広めた、その功績は、日本でもこの後、ずっと語られ続けるでしょう。天の上から、世界の人々に、喜びのリズムを降り注いでください。

ママディ・ケイタの友人

林 英哲

※ 林さんは、世界的に活躍する和太鼓奏者で、ママディさんの友人です。

追悼文掲載の許可を頂きました。



(Photo by S.Oguma)

わたしたちはあなたを忘れない! ～ママディと三島村の友情の物語は永遠に!～

今から27年前、私はNHK番組の制作のためママディさんを日本に招聘した。目的は2つ。日本を代表する和太鼓奏者の林英哲さんとの共演、そして三島村の子供たちとの交流だった。栗原正・元村長がもてなしてくださった鹿児島のホテルの晩餐の席上、歓迎の弁に応えてママディさんはこう語った。

「ギニアの辺地にある小さな村で生まれた私にとって故郷のような村を訪問できることは大きな喜びです。村の伝統から生まれたジャンベのリズムは何千年もの間、祖先がつくり上げてきた文化の結晶です。人間の歴史は小さな村からはじまりました。その伝統をなくすことは人間の文化を失うことです。ジャンベを演奏することは私たちの大切な故郷を守り伝えることなのです」。

過疎化が進む離島の思いを代弁するかのような言葉に、我が意を得たりと瞠目する栗原村長にママディさんはそっとジャンベを差し出し、「あなたは日本の最初の弟子です」と和やかに叩き方を指導、高らかな笑いがこだました。

この日の出会いからジャンベの交流がその後、四半世紀にわたって継続し、大輪の花を咲かせることになるとは夢にも思わなかった。ママディさんとみしまっ子の冒険は各地で大盛況。村を出て行く娘の門付けに故郷を忘れてはいけないと歌う演奏曲「ジョレ」は、三島村の代名詞となって、その後16回におよぶ来日公演でママディさんは必ずこの曲を熱唱し、全国の行く先々で「ミシマ」を連呼した。

やがて三島村にアジア初のジャンベスクールが開校。さらにギニアを訪問した大山村長の熱意によって国際交流が拡大。バランデュグ村診療所建設、ギニアの子供たちの招聘、東京五輪ホストタウン選出、そして、天皇皇后両陛下の御前演奏…。前代未聞の快挙が次々に成し遂げられる小さな村の大躍進に誰もが目を見張った。

6月下旬、私たちに届いた突然の訃報。誰からも愛されたママディさんの死を惜しみ、世界中が悲しみにくれた。そんな中、逝去を伝えるギニア国営放送の追悼番組はママディさんと三島村の長年にわたる交流と友情の物語を熱く語り、その偉業を称えた。ママディさんが残してくれた贈り物、ジャンベの世界遺産を三島村はこれからもずっと守り伝えてゆく。

私はママディさんにそう語りかけました。

TVプロデューサー 野々上勝男

※ 野々上さんは、三島村とママディとの出会いから今日に至るまで、三島村とママディさんの交流に深く関わり、お世話になっていた方です。



1994年の夏、三島村での出会いが全ての始まりでした。

2003年からはベルギーそしてアフリカで本格的にジャンベの指導をしていただきました。人々の生活、民族と音楽の歴史、伝統に対する考え方、それらを教えていたいたときの言葉、景色、匂いが今でも鮮明に蘇ってきます。

三島村にあってもギニアにあっても、そして世界中のジャンベプレーヤーにとって惜しい方を亡くしました。

最高の師、最高のジャンベオラ（達人の意）でした。心からのお悔やみを申し上げます。

三島ジャンベスクール
校長 徳田 健一郎



後期課程 7・8・9年生 交流学習 in ○○

5月30日～6月1日に行われた交流学習 in 竹島・交流学習 in 硫黄島に引き続き、6月15日～17日に交流学習 in 黒島を行いました。今回は、竹島学園と硫黄島学園の生徒が大里と片泊へ行き、ジオ学習や合同学習、黒島観光などを実施。黒島観光では、黒島平和公園や焼酎蔵、白衣観音像など黒島の名所を巡りました。

今年から始まった交流学習 in ○○。学習や学校行事などで他校の生徒と直接触れ合うことが中々できない村内の子どもたちにとって、この交流学習はとても貴重な、そして、充実した時間となりました。

